して活動をしている。

多摩川エコミュージアム交流フォーラム ワークショップの内容報告

＜グループ①…小菅村＞

井村：まず木がなぜ1本100円にしかならないのか、という質問があったのですが、実際東京電力など企業と関係して直接ユーザーに売るかたちであれば、1本100円というよりはもう少し高く売れる。実際世の中一般で言われているところから、値段を変えるという経済的な次の1ステップをするような動きがあるという話がありました。

それから、東京電力など、いろんな人達いろんな団体が入ってきたりというのは、観光客としてもカウントされているわけですけど、「観光客はどのくらい年間来ていますか」という質問がありました。それは、多摩川流域から年間19万人くらい来ているということで、それで、振興課や多摩川源流研究所などの村が企画している企画、いわゆる、「村がこういうイベントやりますから来ませんか」という呼びかけに対して来ている人はその19万人のうち年間2,500人いますという話がありました。

この観光客を源流研究所なり村の役場なりが呼んでいるときに、もう一方で地域の子ども達に地域を知ってもらう、愛着を持ってもらう取り組みをやっているという詳しい話がさらにありました。先ほどの青柳課長の説明でもありましたけれども、春には山菜取り、夏には源流歩き、秋にはきのこ採り、そして冬には雪の上の足跡ウォッチングをしていて、それを「小菅人を育む会」という地元の人たちが地元の子ども達に伝えるというかたちをとっています。その中心になっている人達というのは、地域でエコツアーをいろいろ計画できないかな、と考えている地元の有志が集まった「エコセラピー研究会」です。地域のことを子ども達に伝えることは、将来的にもエコツアーにつながっていくというような意識と意志を持ちつつ教育活動を地域の中でやっているという話がありました。

そこで、青柳課長から逆に質問がありました。「皆さんを流域人として考えるとして、源流を残すための方策をどのように考えますか」という質問です。この問いについて考えてみました。答えは出ませんでしたが、キーワードとしては経済がでました。今、小菅では住民中心のエコツアーをやっていこうとしている。観光協会の人がやってくれるというのではなく、自分たちでお客さんを呼べるようなことを各旅館なり民宿なりが考えていこうと取り組んでいるという話がありました。それに対して、エコミュージアムの実際の経済効果はあるのですかと問いがあり、「あります。」という青柳課長のお話でした。実際の村の行政の中では職員の数がどんどん減らされたりという、やっぱり経済を考えなければエコミュージアムは持続していかないという話にもなりました。

では実際どういうふうな経済効果を生めば過疎化が多少抑えられ、有効的なエコミュージアムの形成がなされていくのかというと、まずは、今小菅村でもがんばっていますけれども、地元の情報をいろんな形にしてまとめていく。それと同時に、無形のものを生み出していく、地域をいろいろアレンジした形で伝えることをもう少し考えていったほうがよいという意見がメンバーの中から出ました。

今まで、「遊び」ということがエコミュージアムの考えの中に意外に入っていなかったのでは、という意見があって、「遊び」というキーワードのもと、伝える側の自分中心ではない語り部、うまい伝え方があるのではないかと。何かを「作る、造る」というよりはもっとソフト面、民間伝承などの伝統的資源によって持続できる地域づくりにつながっていくのではないかというところで、ここからさらに話し合いたかったのですが、タイムアップになりました。以上です。

＜グループ②…長池公園＞

嵯峨氏：新しい公園管理運営の話ということでしたけれども、参加者の方とともに内野さん、私、樋口先生という感じで、割とゆるい感じで雑談をしながら進めていきました。

いくつか補足の質問で出たのが、長池公園オープンまでの経緯はどうだったのかということで、ご講演の中でもあったように、ハンノキ林の保護が昭和40年代に起こったことが契機になった。市民による公園管理運営にまでいく経緯はどうだったのか、ということについては、自然館、ネーチャーセンターのみ2001年から地元のNPOがかなり潜在的に管理運営をしてきた実績が認められたということです。内野さんご自身は植生調査のプロとしてこのフィールドにずっと関わってきたということです。

公園内の小動物についてはどうですか、という質問があって、ノウサギ、タヌキ、シマヘビ、ヤマカガシ、アオダイショウなどがいます。そのほかに、タイワンリ

ス、アライグマ、マスクラットとか外来生物も入ってきていることも課題として出てきました。あと、ここはトンボの種類が多いのが自慢でして、40種類います。特にコサナエというサナエトンボの一種で珍しいトンボもいます。公園維持管理の大方針みたいなものはありますか、という質問には、基本的には里山の景観、里山を維持してきた地域のコミュニケーションを復活していこうというコンセプトがあります。そしてニュータウン開発前の長池公園あたりはどうなっていたのですか、という質問には、昭和10年代くらいまでは酪農、養豚などを主にしていた地帯でしたということです。それと関連して、昔ながらの雑木林の復元は可能なのか、ということなのですけど、えーと、いろいろね、使われないという問題がありますが、すでに公園内の里山クラブが維持するような活動を始めています。隣の多摩市にある博物館で先日「里山の原風景」という展示会が行われていたのですけども、そこの資料によりますと、いわゆる広葉樹だけではなくて松林や真草場というものもかなりあったという展示がありまして、つまり、人間がかなり使い込んでいたところだったのだろう。どういう時代のどういう原風景を復元するのかが議論のテーマになる、という話になりました。

ご提案の部分は、八王子にお住まいの参加者の方からですね、人のための回廊、つまり道路ばかりたくさんあるけど緑の回廊をつないでいかないと虫や鳥などの生物が豊かにならないというご提案がありまして、それはまったくそのとおりでして、農村景観として小野路とか小山台とか残っているところがあるのですが、これまで実は公園的緑地管理というのは生物の多様性をあまり育まないという問題点があったのですけど、内野さんのご報告にあったように、今新しい緑地管理の方法、つまり公園の中で多様性を育むという方法に挑戦中です、という今後注目される話題が出ました。

あと、参加者の方からのご提案をキーワードだけ掻い摘んでご紹介します。ゼフィルス（蝶）が6種類いることの大切さを是非訴えて欲しい。それから、生物多様性の維持をしっかりやって欲しい。昔ながらの雑木林を是非復元させて欲しい。あわせて、切った樹木の再利用のシステムを南多摩地域くらいのエリアで何とか作れないだろうか、つまり、一つの公園だけでは無理なところもあるので、まぁちょっとネットワークしてということですが。当然使い道を確立するということがこのシステムのポイントだよね、ということでアイデアを皆さんあれこれお持ちでワイワイしゃべっていましたけれども、まとまりませんでした。

それから園芸種・ペットなどを拡散させないための良い方策はないでしょうか、マナーの問題、ルールの問題いろいろあると思います。それから、すぐ近くのところに住んでいる大学生の人から大学生が何かやれるか考えました。是非現場に来てくださいという話にもなりました。以上です。

＜グループ③…小金井市環境市民会議＞

早﨑氏：こちらのグループは、三鷹の方と立川、国分寺、江東区と4人の方がいらっしゃいました。それで、なかなか核心には触れていきづらかったのですが、すごくいい意見が出ていました。質問としては、「みどりマップ」を作ってこれからの小金井の緑はどうなっていくのか予測はつきますか、ということだったのですが、お答えとしては予測はつきにくい。相続の問題もありますので今のところ対策はない状況ということで、これからも勉強会を続けて何とか緑を残せるようにしたいね、という話になりました。あとはですね、環境基本計画の中に市民会議を作った経緯を教えてください、ということでした。環境市民会議ができるまでには環境条例があり、市民の関わりがあり、市民会議の位置づけとか。市は市民会議を支援しなければいけないというふうになっていますので、共同でこれからももっといろいろなことを展開していきたいなと思っています。まだ去年立ち上がったばっかりですので、まだ未来がありますので……。

それと、市民学科の環境学習ということなのですけど、環境学習とは言っているのですけど、「環境」というもの自体に対してある方から出まして「環境って何だ。環境ってなんかうさんくさくないか。助成金って何だ。あれは企業のイメージアップではないか。」そういう意見が出ました。ああ、なるほどな。そういうふうに感じることもちょっとあるよね。石油会社が「エコ！エコ！」って何か変じゃない？　とか。まぁ、そんなこともちらっと考えさせられる意見が出ていました。環境が少しビジネスになっているのではないの。その辺ちゃんと私たちが見極めていかなければいけないのではないか、ということだと思います。

締めくくりとしてはですね、もっともっとデータが必要ということですね。人が歩いて「みどりマップ」を作りましたけれども、調査ってすごく大変なのですけども、自分たちが環境、命を育んでいる場所っていうものをもっと知って、知った上で「じゃあどうしていけばいいの？」「じゃあこれをやろう。」っていうふうに次にどんどん展開していくことが大切なのではないかと

いうことです。それと、もっともっと協力したいという人はいっぱいいるし、出席してくださった方の中にも「協力したいです。」っておしゃってくださった方もいらっしゃいました。やっぱり続けていくことが大切ですね。あとは生ゴミの堆肥の問題も難しい、ということで終わりました。以上です。

＜グループ④…多摩川エコミュージアム＞

佐野：最初、眞智子さんのトークで始まって、このままほっとくと30分ずっと眞智子さんがしゃべっているかもしれなかったので、途中でちょっと私が入って、まずは学生のみなさんから質問を出させました。1つはどうやって活動にこんなにたくさんの人を巻き込んで活動をされているのですか。それに対しては、時間をかけて信頼関係を作ってゆっくりと人を巻き込んでいく。学校に対しては、学校は安全管理が敏感なので絶対安全であることを実績を通して示して安心してもらって再び活きるように作っていくという形でした。絶対人を集めないと、人をいかに集めるかが1番大事だということでした。

次は、眞智子さんが考え出した河童の川流れが人気があるのはどうしてなのか。人が河童のように流れている感じでしたね。この質問に対しては、日ごろやったことのない、やらないことをやったらおもしろいのだ、という意見ですね。もう1つは、普通の格好ではやらせない危険なことを安全にできるから。危険なことを安心してできるから。実は、河童の川流れを行う周りとしては、レスキュー部隊というかたちで待機して、何か事故があったら対応できるようにしている。そういう状況でおもしろすぎる遊びをしているという話です。

3つ目は、あまり鈴木眞智子さんの報告には「教育」という表現が出なかったのですが、これはどうしてですか、という質問に対しては、「自分自身は教育なんておこがましい、むしろ自分が環境教育をしてもらっているのだ。あまり教育するんだという感じではやりたくない」という話で、大学の先生だったりとか専門家よりも地域の名人芸を持つ普通の人たちをどんどん巻き込んでいくという話がありました。

それで、こういう質問タイムが最初にありまして、そのあと、簡単なワークショップで、こうした川を使った環境学習とか環境教育をしていく上で1番大事だな、と思うことを挙げてみよう、ということでワークをしました。そうしましたら、やはり川で行うということで危機管理、安全管理、万全な安全対策これが大事だと、一方でちょっとスリルを伴った楽しさ、安全に危険なことを楽しむ、こういうスリルのある楽しさも川だからこそできることなのだ、ということでした。こことここはつながっています。それから、地域のつながりや連携の力がこうしたプログラムの実現していく上でとても大事だと、一方、川を通して人間だけではなくて川と魚、鳥、植物、石といった非生物を含めていろんな生き物とのつながりができる、それによってまたさらにパワーが生まれて活動を続けさせていける、という話が出ました。

あとは、学び方としましては自分自身がもしくは町がどう変わったかを絶えず振り返っていく、それが学びなのである。こういった活動を通して、町が変わったり、川と人間との関係が変わったり、自分自身が変化していくことをお互いに見つめあう。そういった発見を通して学んでいけるというところが川の環境学習ではないか。

あとは、態度ですね。特にこのプログラムを行う主催する側の団体なり人たちにとって大事な姿勢や態度としてはまず動くこと、行動力。これは鈴木眞智子さんのプレゼンテーションにもありましたが、まずは自分が動いてみる、どんどん動いて人を巻き込んでいく、行動力である。また、人を楽しませると同時に自分も楽しむ。これは先ほどの話でもありましたが、自分が楽しくないと子ども達はついてこない。子ども達は敏感だから、大人がなんか信用とか、やらせようとしている態度は敏感に感じとって逃げていく。大人自身がすごく楽しんでその大人が楽しんでいる態度を見て、子どもたちも入っていく。

あとは、身近な地域に対する愛というものがあってこそ成り立つ。また、機会を提供する側の人間が水辺とか川の環境に関する知識・技術をきちんと知っておくことが安全管理になるし、子ども達にとっても驚きとか感動を与えられるようなものになる。あとは、川のキャパシティ、川の容量、川の生態系を超えて人間が踏み込まない。眞智子さんのほうでもお酒を出すのですけど、川辺だけではお酒を飲まないということで川に敬意を表しているという話もありましたが、まあ、やはり人間がみだりに入ってはいけないところもちゃんと知った上で安全に川の憩い中で遊ばしてもらうということが大切だなということが全体で出ました。以上です。

司会：それでは最後に報告者、講師のみなさんから一言いただいて終わりにしたいと思います。

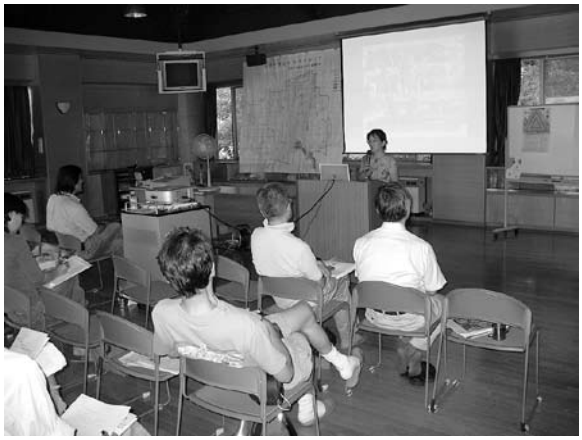
青柳氏：どうも大変ありがとうございました。私もこういうところでやりますのはなかなか機会が少ないもの

ですから、どれだけ伝えられたかわからないですけど、川は一帯で管理したい。上流から下流の一帯のみなさんでやっていければいいなとつくづく思いましたので、また（小菅村に）戻りまして実行に移していきたいと思います。ありがとうございました。

内野氏：最近公園管理に自分が埋没している中で今日はこういう場でいろんな地域の話題にエネルギーをいただいたような感じで、環境学習の意義を再認識できたような気がしますので、これから流域全体の中で人とのつながり、自然とのつながりを考えていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。どうもありがとうございました。

平井氏：今日は地元小金井の学芸大で私たちの活動を報告させていただき大変ありがとうございました。それから、まだ明るいうちにお帰りになる前に少し田んぼをご案内したいと思いますので、まだご覧になったことがない方はこちらの玄関のほうに後ほどお集まりください。ご案内いたします。今日はどうもありがとうございました。

鈴木氏：本当に今日はありがとうございました。私はこういう性格なので子どもに接するときも市長に接するときも誰に接するときも全然態度を変えない本音で生きている人間なので、うまい言葉きれいな言葉で皆さんにお伝えせず、ありのままを伝えてしまいました。大変そういう点で申し訳なかったと思っています。でも、是非、みなさん多摩川を大好きになってください。よろしくお願いします。ありがとうございました。

嵯峨氏：私のところも多摩エリアの一市民団体、NPOなのですけど、柄にもなく基調講演の役割だったのですが、とても早口でべらべらしゃべったのでお聞き苦しかったと思います。言い忘れたのですが、ホームページのアドレスを書きました。今日しゃべったことほとんど文章化して、そのホームページの中に載せています。メールマガジンを発行しているのですが、ここで「なんちゃってエコミュージアム言論」というものを連載していましてそこにほとんど文章化してありますので、もしご興味のある方はご覧になってください。今後ともよろしくお願いします。

司会：報告者のみなさん本当にありがとうございました。（会場、拍手）